

## 猪名川自然林サポータークラブ 「タマムシのとぶ森づくり」

三好悦夫・柳楽 忍・白樫誠治・福本吉雄・石丸京子(自然と文化の森協会)

### はじめに

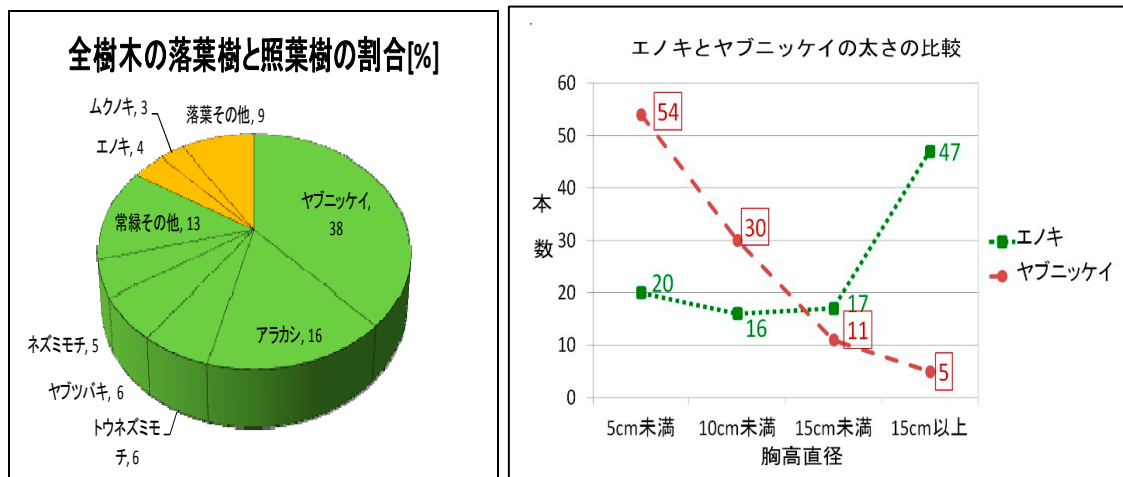
私たちの活動の場である「猪名川自然林」は、尼崎市北部にある猪名川の旧河道約 2km に成立していたエノキ - ムクノキ林を前身とする森林である。1967 年に行われた猪名川のショートカット工事により、廃川となった蛇行部の堤防に成立していた林で、一部は都市公園として樹木（主に照葉樹）の追加植栽が施されているが、大半は手付かずのまま保全されてきた。県のレッドデータブックでは自然景観として B ランクに、植物群落として C ランクに指定されている地域の貴重な自然資源である。しかしながら公園として保存された約 40 年の間に、クスノキの高木がエノキ、ムクノキをしのぐ大木となり、また林内にはヤブニッケイ、ネズミモチなどのほか、植栽されたアラカシ、タブノキ、クロガネモチなどの照葉樹が大きく成長し、かつてのエノキ、ムクノキの落葉樹林の景観が損なわれつつある。

一方、タマムシは、エノキやケヤキなどのニレ科の植物を餌としており、枯れかけたエノキの幹に産卵する。尼崎という自然の少ない市街地でも、いまでも猪名川自然林にはこの美しい昆虫を見ることができが、このまま照葉樹が生い茂っていくと、タマムシの生息する環境が失われる恐れがある。

そこで自然と文化の森協会では、尼崎市と協働で猪名川自然林サポータークラブを開催し、「タマムシのとぶ森づくり」をキャッチフレーズに、市民の憩える明るい森づくりに取り組んできた。多くの生き物が集う生物多様な森に整備することで、明るい景観を取り戻すとともに、地域の生物多様性保全につながるよう、さまざまな活動を実施している。

### 毎木調査と管理活動

2006～2007 年に自然林の一部（風致公園）において植生の現況を明らかにするため、1600 本に及ぶ毎木調査を行った。その結果、最も多い種はヤブニッケイで、次いでアラカシ、トウネズミモチ、ヤブツバキと、照葉樹の本数が非常に多く、全体の約 8 割を占めていることがわかった（グラフ左）。また落葉樹で最も多いエノキと照葉樹で最も多いヤブニッケイの太さごとの本数を比較してみると（グラフ右）エノキは直径の太い大木が多く、細い若い木が少ないのに対し、ヤブニッケイは、細い若い木が非常に多いことが分かった。このように薄暗い林内では若い落葉樹がほとんど育っていないことなどが明らかになり、このままで放置すると、将来、エノキ、ムクノキの大木が枯れた後は、照葉樹林へと遷移すると考えられる。そこで毎木調査のデータを基にして市と協働で毎年の管理計画をたて、エノキ - ムクノキ林の保全活動を進めている。



2007-2009年には要注意外来種であるトウネズミモチを全木伐切した。またアラカシやクスノキなどの枝打ちをすることにより、林内の光環境を改善した結果、春にはたくさんのエノキ、ムクノキ、ケヤキなどの落葉樹が芽生え、幼木に育つ個体も見られるようになった。

#### サポーター講座の開催による仲間作り

私たちは、地域の貴重な自然資源の保全活動には、仲間づくりと次世代への引継ぎが重要だと考えている。多くの人に猪名川自然林への関心を持ってもらうため、市民に向けて年数回のサポーター講座を開催している。植物や昆虫などの自然観察や標本作り講座で、いきものに親しむとともに、専門家を招いて自然林の植生や生物多様性の保全について学習し、保全活動の重要性を周知するよう努めてきた。

また伐切木をゴミとして処分せず、再利用する活動も取り入れている。伐採木を利用したバーベキューやバームクーヘン作りなど、楽しいイベントも行い、多くの人を呼び込むための工夫をしている。

さらに近隣の小学生を中心とした猪名川キッズクラブと連携した活動や、小学3年生の環境体験学習を受け入れることにより、次世代につながる猪名川自然林の保全活動を目指している。子どもたちと一緒に、伐採木を使ってクラフト作りをしたり、自然林で採取した種子から苗を育て、自然林に植樹し、育てるなどの活動に取り組んでいる。



写真：猪名川キッズクラブと一緒に、伐採木をクラフト用に加工している様子

このような活動が認められ、これまでに朝日森林文化賞（朝日新聞社 1983 年）地域づくり総務大臣表彰（総務省 2005 年）人間サイズのまちづくり賞（兵庫県 2004 年）などを受賞した。

いきものゆたかな、タマムシが飛び交うエノキ・ムクノキの猪名川自然林を、次世代の子どもたちへ引き継ぐよう、今後も活動を続けていく。